

(海外最新事情)

イギリス

ロアルド・ダールの幻の小作品

ロアルド・ダールの未発表作品が発見された。それも海辺の小さな町の小学校教師の自宅から。それはわずか10行からなる短い詩だが、書かれてから14年ものあいだ、他の書類に紛れて放置されていたという。ニュースソースは2003年10月18日付の『インディペンデント』紙である。

ロアルド・ダール (1916~90) は今なお英語圏で最も人気のある童話作家のひとりである。ウェイルズの首都カーディフに近いサンダフ (Llandaff) でノルウェイ人の両親のもとに生まれ、地元のグラマー・スクールを卒業して18歳でシェル石油に就職、第二次大戦では空軍のパイロットを勤めた後、専業作家として成功した。代表作として長編童話『チョコレート工場の秘密』*Charlie and the Chocolate Factory*、『マチルダは小さな大天才』*Matilda*、『魔女がいっぱい』*The Witches* の他に大人向け「童話」といわれる『オズワルド叔父さん』*My Uncle Oswald*、短編小説集『あなたに似た人』*Someone Like You*、また自伝『少年』*The Boy* などがある。平易な英語で書かれた奇想天外な物語は、英語学習者が原文で読破するのもにも適している。ほとんどの作品がパフィン、ペンギンいずれかのペーパーバックで入手可能である。

発見された原稿はイングランド南海岸のドーセット州クライストチャーチにある小学校の生徒たちのために書かれたものだった。内容は生徒の耳をひねるという体罰を繰り返す残虐な教師を諷刺したものである。この教師は歴史の授業で年号を暗記できない生徒の耳をちぎれるまでひねり続けるので、そのクラスには耳が片方しかない生徒が大勢いる。そして最後に、君たちの先生はこんなにひどい先生でなくてよかったね、という結論に至

る。いかにもダールらしい作品である。ついでながら一部の想像力が欠落した愚かな親や教師は、この種の「残虐性」を理由にダールの作品を子供に読ませたくない主張する。

クライストチャーチのこの小学校の教師ジェニー・シボールドは、生徒たちが送ったファンレターに対する返事としてダールから届いた手紙に添えられたこの詩を、未発表の作品だとは夢にも思っていなかったらしい。今回校長のマーク・ロヴィーがロアルド・ダール基金協会に問い合わせたことで、幻の未発表作品であることが判明した。

それにしてもダールから手紙が来るとは、何と羨ましい小学校であることかと思っていれば、今度はマドンナが小学校に自作の童話『イングリッシュ・ローズ』を朗読に来るという企画があるらしい。10月24日付の『タイムズ』紙によると、タイムズとペンギンの共催で英国全土の7歳から11歳の小学生を対象に1000語以内の短編童話を募集し、その優勝者の学校にマドンナが朗読に行くとのことだ。最近マドンナは何かとアメリカ合衆国に対して批判的であり、ロンドン郊外に居を構えて普段は英国で生活しているらしいが、ともあれダールからの手紙とマドンナの来訪では、後者の方がより羨ましい気がする。(安藤 聡)

アメリカ

Spanglish!?

今、あることばが Unaited Esteits を席卷しようとしています。まさにその綴りに代表されるように、Spanglish と呼ばれるスペイン語綴りの英語のことです。といってもその形式はまちまちで、(1) 英語とスペイン語を交互に織り交ぜたコード変換 (code switching) と呼ばれるものから、(2) スペイン語の母体 (文法) に英語表現の直訳をちりばめた形、(3) スペイン語表現を英語

の文法に沿って表したものの、(4)そして英語表現をスペイン語の(あるいはその起源であるラテン語式の)音声表記に置き換えた類のものまであります。このままではわかりにくいでしょうから、(雑誌の見出し風に)日本語と英語で同じことをしてみるとこんな感じでしょうか。(1)「2004 Winter, 男を磨く Ranch coat!」、(2)「NY摩天楼 (sky scraper より) と聖林 (ハリウッド: holy wood との誤解から) の生活術」、(3)うーん、むつかしいけど、「彼が知っているとは思わない」みたいな、いわゆる直訳調日本語、(4)そして「この冬、^{アメリカ}亜米利加で暮らす!」となるでしょうか。上記の Unaited Esteits はこの最後の例です。

このような社会現象に目を向けるきっかけ(あるいはその火付け役)となったのが、名門 Amherst College でスペイン語と作文術を教える Ilan Stavans 教授です。Spanglish: The Making of A New American English (2003) という本を出版し、4500語(現在はそれ以上)からなる Spanglish-English の対応表を組み込んだ画期的なものです。メキシコ系ユダヤ人でイディッシュ語(おもに欧米のユダヤ人が用いる言語で絶滅が危ぶまれる)を母語とするこの方、イディッシュ語の癖は踏ませまいとスペイン語と英語に引き裂かれたアイデンティティー救済のため、Spanglish を一つの社会方言として定着させ、米国におけるこれからのヒスパニック系の若者の社会進出や教育に役立てるといふ崇高な目的を掲げています。また、(悪名高き)英語の音声と綴り字の不一致もこの動きに加担しています。(古英語では綴り字と発音が90%以上一致していましたが、現代英語ではほんの40%に過ぎません。)もちろんこのような発想は多くの敵を生みました。純粋なスペイン語擁護論者や英語を合衆国の国語に制定しがっている層からは破壊者呼ばわりされ、一部の社会団体からは、ヒスパニックへの偏見を助長し社会進出への弊害だとして糾弾されるなど、Spanglish の認知はイバラの道です。

2000年の全米国勢調査において、いまやヒスパニック(12.5%)は、黒人(12.1%)を抜いて米国最大のマイノリティ集団となりました。増加率はどの民族集団よりもずば抜けています。しかし、一口にヒスパニックといってもその出自はさまざま

です。最大のメキシコ系(約60%)を筆頭に、プエルト・リコ系(約10%)、キューバ系(3.5%)、ドミニカ系(2.2%)などが続きます。また彼らの主な居住地も NY ブロンクス、カリフォルニア、アリゾナ、テキサス、フロリダなど全米に渡っています。そしてこのそれぞれに特有の Spanglish があるわけです。私がかつて住んでいたアリゾナ州のツーソンでも、至る所でスペイン語が聞かれました。そして1998年当時でさえも、スペイン語のTV番組に加えて Spanglish の(!)DJ放送などがありました。当時は驚きとともに受け止めた Spanglish ですが、上記のような本が出版される現状から推測するところ、全米的に(幾分の)市民権を得始めているということでしょう。また、このような混交言語は世界的な趨勢ともいえます。Singlish (シンガポール・イングリッシュ)、Janglish (ジャパニーズ・イングリッシュ)、Franglais (フラングレ: 英語多用のフランス語)、Denglish (デングリッシュ: ドイツ語・英語混用)など、数え上げたらきりがありません。良くも悪くも、文化的・民族的価値を代表する母語と、グローバル化の権化たる英語との折り合いを付けようとする民衆の欲求と知恵の産物なのでしょう。

(片岡邦好)

ドイツ

20世紀を生きぬいた映画監督レニ・リーフェンシュタール

ドイツの女性映画監督レニ・リーフェンシュタールさんが、2003年9月8日ドイツ南部ベッキングの自宅で亡くなった。彼女は1902年生れで、前月の8月22日に101歳の誕生日を祝ったばかりだった。20世紀のほとんどを覆う彼女の生涯は、あまりにも華々しく、そして苛酷だった。

20歳代のはじめモダンダンスの世界でデビューし、伝説のダンサー、イサドラ・ダンカンやアナ・パブロワの後継者と目されていたが、膝を痛めて挫折する。その後映画の世界に転身し、名女優マレーネ・ディートリヒとほぼ同時期に女優としての活動を開始した。その後彼女は一連の山岳映画で主演をつとめ、『青の光』(1932)では監督・主演・編集を独力で成し遂げ、映画監督としての

才能を開花させた。

そんな彼女の才能に目をつけたのが、権力を掌握したばかりのヒトラーであった。『青の光』を見た彼は首相官邸から直々に党大会の記録映画を依頼してきたのだ。彼女は最初は断ったというが、はたして当時いったい誰がその誘惑を断ることが出来ただろうか、そもそも断ったとしてもそれが許されたのだろうか。しかし当時は多くの才能ある若い人たちがそうやってチャンスをつかんでいったのは事実だった。

ナチス党大会の記録映画『意思の勝利』(1934)は、権力者の期待に見事に応えたものだった。彼女はさらに、ナチスが威信をかけた一大祭典ベルリン・オリンピックの記録映画を任されることになった。これが傑作『オリンピア』(『民族の祭典』と『美の祭典』の2部作、1938)である。この作品はヴェネチア国際映画祭で最高賞を受賞した、その後の記録映画にあてたこの作品の影響は計り知れない。このとき彼女は36歳、人生の絶頂期だった。

その後の彼女の人生は暗転する、戦後ナチスの協力者として約4年間収監された。映画の世界の表舞台からは姿を消していた。

しかし彼女は芸術の世界、映画の世界を信じ続けていた、みずから信じる美を辛抱強く求め続けていたのだ。彼女は71歳のときアフリカのヌバ族を題材にした写真集を発表し、写真家として人々の前に姿をあらわした。そして80歳代でみずから海に潜り海中撮影をこなし、100歳のとき映画『原色の海』を発表するなど積極的な活動は死の直前までおとろえることがなかった。

まさに彼女は映像の世紀とよばれた20世紀の申し子だった。そして時代はその子に才能を与えはしたが、決して甘やかすことはしなかったのである。(島田 了)

フランス

ムーラン・ルージュに罰金刑

フランス一の歓楽街といえ、パリのピガール地区 Pigalle だ。Star-Dust, Taxi Girls, Noctambules (夜遊び好き) などその数50ほどのゴーゴ・バー bars à gogo やキャバレ cabarets が

集まるピガール広場で、最近また、この街の評判を悪くする出来事があった。世界的に名を知られたキャバレ、ムーラン・ルージュ Moulin Rouge (赤い風車) が人種差別の罪で巨額の罰金に処せられたのだ。

話は2年前に遡る。セネガル国籍のマレガ氏はこの店に職を求めたが、表向きスペイン語が話せないとの理由で採用されなかった。応募資格には要求されていなかったことだ。そこで、「人種差別 SOS」に事情を話し、この団体とともに、この店と店の人事担当秘書ミシュリーヌ・ブジを訴え出た。2002年11月22日の初審判決で、原告マレガは損害賠償金と利子4,500ユーロ、「SOS」は2,300ユーロを得た。また、ブジには3,000ユーロの罰金が言い渡された。訴訟費用900ユーロは敗訴側持ちになった。キャバレと彼女はただちに控訴したが、今年10月18日の判決で、ムーラン・ルージュに10,000ユーロ(126万円)、採用担当者には1,500ユーロの罰金が言い渡された。「勝つとは思っていたが、こんなに完璧にとは！」と、「SOS」の副会長は驚いている。

「このキャバレでは、採用時に黒人をはずしている」というのが、勝訴側の言い分だった。ミシュリーヌは、「調理室では黒人は採用しています」と反論していた。調査の結果、この店では、40年余り前から客席担当者には一人の有色人も採用したことがないのがわかった。

革命以来、自由 Liberté、博愛 Fraternité とともに平等 Egalité を国政の理念に掲げる国フランス。政治亡命者を積極的に受け入れ、人権尊重については大びらに発言が繰り返されてきた。民間でも平等は尊重されて差別はなかったはずだ。(実際には、どこにでも差別はある。人は差別好きだ。差別して自己の弱みを隠そうとする。)

首都パリは、ニューヨークとともに世界の人類の見本市のような場所だ。ピガール広場へ行けば、あらゆる国の人々に会うことができる。旅行者は、シャンゼリゼ Champs-Élysées、エッフェル塔 Tour Eiffel、ルーブル Musée du Louvre と見てまわった後、必ずこのネオン輝く夜の町を訪ねる。ミニスカート mini-jupe の女の子 filles は路上で客引きができる。だが、これはもう昔の話だ。取り締まりが厳しくなり、パクられる se faire piquer ことをこわがって、ウィンク oeilade も

派手な姿もバーの奥が、どこか遠くに消えた。人々は寄りつかなくなり、モンマルトルのサクレ・クールの方へ流れるようになった。「ピガールはもうピガールではない」、と広場を知る人は言う。

これまでたんまり à grands flots 儲けていたバー、キャバレのオーナーたち patrons は、あわてだし、無理するようになった。80年代以降この町は物騒になった。詐欺、背信、現金強奪がひどくなった。放埒 débordements、不法行為 pratiques が増えたのだ。すり pickpockets が待ち伏せているから、かっぱらわれに se faire arnaquer、行くようなものだ、との評判が立つ。客引き rabatteurs、ぼん引き proxénètes の数は増えに増えて、ショーはタダだ gratuit と言われて喜んで不用心なかも gogo は、連れ込まれた店で、女たちから寄って集って飲まされる。もういいと言って出ようものなら、客が少ないことに腹でも立てたかのようにふっかけてきて saler la note (l'addition)、1,500ユーロ以上にもなる勘定書 la note (l'addition) を突きつける。客がつべこべ言おうものなら、入れ墨をした荒くれ者 gros bras が腕組みして待ちかまえている。客は、金ばかりか、キャッシュカード carte bleue、時には後々圧力をかけるためか身分証明書 carte d'Identité のコピーまでとられる始末。身ぐるみはがれて se faire plumer 放り出されるという仕掛けだ。「ピガールは旅行客が破滅しに行く aller se perdre 街だよ」と、ある警官は言っている。

苦情の多さに、パリ警察はピガール浄化 assainir に乗り出した。パトロンたちを監視し、同じ施設で3回苦情があれば9日間の閉鎖など(特に厳しい場合半年にわたることもある)言い渡してはいるが、ごろつきども bandits はどこの国でも手強いものだ、同じ犯罪 délits を繰り返す。「外国人にパリの悪いイメージを与えてしまう」と、専門家は嘆いている。落ちた評判は回復が難しい。

ともあれ、今度の裁判は、フランス司法の健全さを示す一方、ますますこの歓楽街の将来が怪しくなったことを証明した。(河原誠三郎)

中国

見る、聞く、読む、中国最新情報

CNNIC「中国インターネット信息中心」(China Internet Network Information Center)が公表した2003年7月の統計によれば、中国では、ユーザの1週あたりの平均利用時間は13時間、1週あたり平均4.1日、インターネットにアクセスしています。ユーザ総数は6,800万人、接続方式別では、専用線接続で2,342万人、ダイヤルアップ接続で4,501万人、ISDN回線接続が490万人、ADSLやケーブルモデムといったブロードバンド接続が980万人です。接続別ユーザ数には複数の接続方式をとるユーザが含まれています。これらの方式に加え、モバイル端末や情報家電を利用してアクセスするユーザが180万人となっています。Webサイトもおよそ473,900あり、中国から発信される情報もますます増加しています。このことから、視点を少し移動させ、オンラインによる最新情報の集め方に注目してみました。

さて、学生のみなさんは、中国に関する情報を、どのように入手しているのでしょうか。Webサイトの検索、メールマガジンやメーリングリストを利用するというのが基本的な方法ですが、中国語のサイトを見るには、まだ力不足だと感じている場合でも、日本語で書かれた「日文版」サイトを通じて、中国の最新情報を入手できます。

人民日報Web版である「人民網」には、日本のトピックを主とする「日本版」と日本語の「日文版」サイトがあります。毎日「日文版」をチェックするだけでも、中国の現在の動向を把握できるでしょう。「北京週報Web版」にも「日文版」がありますし、さらに、月刊誌「人民中国」のサイトも参考になります。

中国国際放送局の北京放送Webサイトも内容が豊富で、定期的にチェックすることを勧めます。中国国際放送局ではWebラジオとして日本語や中国語放送のサービスも提供しているので、ニュースを聞くこともできます。ストリーミング放送としては、中央電視台 CCTV では、インターネットでテレビ放送のライブ配信をしています。また、オンデマンド方式で、動画データを見ることも可能です。

これ以外にも、いろいろなサイトがありますが、例えば日経 BP 社が提供する「Biz Tech」の中国チャンネルもビジネス関連の最新動向速報を配信しています。このサイトは、さまざまなニュースソースから、記事が集められています。

Webサイトを毎日チェックしていたのでは、時間がいくらあっても足りません。「人民網日文版」はメールマガジンを発行しています。配信されたメールから、トピックと概要を読んで、サイトにアクセスするかどうかの判断をするのに役立っています。

ここで注意しておきたいのが、どのメールアドレスに配信させるかということです。一つのアドレスだけで処理する場合、メールソフトで仕分け設定をするなど、受信したメールを整理、管理しないと、すぐに、メールがたまってしまいます。特に、日刊ペースで配信されてくるタイプのものは、読まなくなる、読む気がなくなることもあるので、要注意です。メールマガジンをたくさん登録しても、多くのメーリングリストに参加しても、結局は、未読のままでは意味がありません。

筆者の場合、複数のメールアドレスを活用しています。無料のWebメールを利用し、メールマガジンの配信先アドレスとして登録しておきます(場合によっては、無料のWebメールを配信先に指定できないこともあります)。こうすることで、どこからでも情報を見ることができるようになっています。Webメールは容量が限られているので、必要なものは、個人用のメールアドレスに転送し、それ以外はどんどん削除しています。

最後になりましたが、メールマガジンにしる、Webメールにしる、有料無料の区別は当然としても、しっかりと内容を吟味し、注意書きや但し書きを確認して、使用することを忘れないで下さい。

CNNIC <http://www.cnnic.net.cn/>

人民網日文版 <http://j.people.ne.jp/home.html>

人民網日本版 <http://japan.people.com.cn/>

人民網 <http://www.people.com.cn/>

北京週報日文版 <http://www.pekinshuho.com/>

北京週報 <http://www.beijingreview.com.cn/>

人民中国 <http://peopleschina.com/index.shtml>

Biz Tech中国チャンネル

<http://biztech.nikkeibp.co.jp/biztech/china/>
中国国際放送局北京放送

<http://japanese.cri.com.cn/>

Radio 4 U 日本語放送

<http://online.cri.com.cn/radio4u/japanese.html>

Radio 4 U 中国語放送

<http://online.cri.com.cn/radio4u/standard.html>

中国中央電視台 <http://www.cctv.com>

(吉川 剛)

編集後記

「語研ニュース」第10号をお届けします。21世紀になっても明るい未来は見え、2003年でもまたイラク戦争ではじまり、戦争後も情勢は悪化するばかりです。「力」の論理では平和がもたらされないことは明らかです。何よりも重要なのはコミュニケーションであり、「力」の論理はそのコミュニケーションの放棄であると言えるでしょう。コミュニケーションを支えるのは言葉です。外国語学習の目標は当該外国語の運用能力を身に付けることですが、それはコミュニケーションによる相互理解の可能性を広げることであると言えるのではないのでしょうか。以上は、まもなく2003年を終えるに当たっての雑感です。(MT)